

「信仰の足腰の鍛錬」

ヘブライ人への手紙 12:3-14

2025年6月29日(主の日)

先週の予告から変更しまして、一節前の第3節から読むことにしました。今回の箇所を読めば読むほど、3節と4節をつなげて読まざるをえなくなったからです。「あなたがたが、氣力を失い疲れはててしまわないように」と3節は語ります。この手紙の宛先の教会、手紙の著者が説教をしたこの長老は間違いなく疲れています。具体的な問題はこの書物全体でも記されていません。想像するしかないのです。罪の救いの確信があやふやになっていた、というのが一つのテーマでしたので、信仰者であるはずなのに、救いの確信が持てない、あれをすればいいかもしれない、これをすれば・・・と検討はずれのことを続けることに疲れていたのかもしれませんが。あるいは、この時代は迫害されていました。4節の「血を流すまで抵抗したことがない」という言葉から、この聴衆は直接迫害を受けていたわけではなかった、と考える人もいます。そうすると、他の地域の迫害のニュースを聞いて心をいため、次は自分たちか、そういう緊張感の中にあっただのかもしれませんが。暴力的な迫害がなかったとしても、外でおおっぴらに信仰者であることを言うことはできなかったかもしれません。そういう緊張は疲れを生みます。社会がいつまでも変わらず、神のご計画はどうなったのか？と疑うような思いが生まれることもまた、信仰的な疲れの原因です。あるいは、自分の教会の中、自分の信仰生活のこともあるでしょう。信仰生活を続けていく中で、最初の信仰の情熱が冷め、礼拝や奉仕への意欲が低下してしまいました。実際礼拝から離れてしまった人がいたことがわかります。自分自身もまた、罪との戦いに何度も敗れ、自分自身の弱さに絶望し、信仰を続ける意味を見失いそうになることもあるでしょう。そういう思いをいつもふるいたたせなくてはならない、というのも時に必要なことですけれど、やはりそればかりでは疲れるでしょう。こうしてみると、このヘブライ人と呼ばれる教会の群れがかかえていた疲れというのはわたしたちが抱える信仰の疲れとなんらかわらないのかもしれませんが。信仰者であるがゆえに、この世において、弱く信仰のうすい自分が、信仰に生きようとするがゆえに疲れるのです。

けれども、説教者は語ります。「あなたがたが、氣力を失い疲れ果ててしまわないように」。疲れている、けれども疲れ果ててしまったわけではないのです。疲れた時、ぼうっとするのか、うずくまるのか、人それぞれだと思いますけれど、疲れ「果てて」しまったわけではない。もうやめた、とは言っていない。まだ希望はあります。だからこの説教者は「そうなる前に、主イエスを思い出しなさい。ご自分に対する罪人たちの反抗を忍耐さ

れたあの主イエスを思い出しなさい」と言うのです。わたしたちは、確かに疲れるでしょう。けれども、そこから立ち上がるには、自分で奮起するのも、他の何かに頼るのでもなく、イエス様のことを考える、イエス様にたちかえることによってのみ、立ち上がることができるのです。

さてそこで「あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがありません」と説教者は語ります。これを理解するために3節から読む必要があると考えたわけです。ご自分に対する罪人、それから罪と戦ってという時の罪、とは一つ一つのみ心に背く行いのことではなくて、背教、棄教することをこの説教者は第一に考えています。殉教にあったときに棄教してしまうことがあったことが背景でしょう。少し前にも、礼拝をやめて教会をさってしまう人がいることが語られていました。主イエスは、神などいらないと、御子を侮辱し、神なしで生きていこうとした人たち、その罪と戦って十字架におかかりになったのです。聴衆はたしかに自分の不信仰や疲れと戦っていたでしょう。しかし、信仰を捨ててしまうほどのものとの戦い、主イエスのように血を流して自分の命をすてなくてはならないほどの抵抗・戦いはしていないのです。それは、今の疲れの問題が、主イエスが命を捨てられた罪に比べればまだなんとかなる、という励ましであり、何よりも、主イエスがすでに抵抗し戦い、忍耐してくださった。だからわたしたちはその御業を恵みとしていただければよいのだ、という励ましでもあるのです。

疲れた時、わたしたちは判断を誤ります。

信仰のことがらについても同じでしょう。だからこそこで説教者は、主イエスがすでに罪に勝ってくださったのだから、わたしたちはそれに乗っかればよいのだ、と励ましてくれるのです。

けれども、同時にわたしたちは目に見える形で自分の体を使って信仰生活をするわけで、主イエスにおまかせするからといって何もしないで寝ているわけではないわけです。そこで、これは箴言の言葉ですけど、主の鍛錬をうけなさい、今の困難を鍛錬として忍耐しなさい。そういいます。ここで気をつけなくてはならないとおもうのは、なんでも不幸や困難を神の試練だ、などと言うことはさげなければならないということです。理不尽なことは、戦ったり、しぶしぶ受け入れたり、次にいかしたりすることですけど、それを神が意図的に、まるでよいことのようにお与えになることは危険とすら言っていることです。人の不幸を神の試練などというのであれば、いったい神の救いとはなにか、ということになってしまいます。もちろん、足りない私達に対する神の罰であろうはずがありません。あの被害者を多くだした災害を、神が与えた試練だなどと言えるだろうか。あのむごい戦

争を神があなたを鍛えるために与えた訓練だ、などといえるでしょうか。ここで説教者はあらゆる苦難を訓練として受け入れなさいとは言っていません。あらゆる困難の理由に神を持ち出しているのでもありません。ここで説教は、苦難の時にも神への信仰からはなれないようにとの会衆への励ましです。苦難を乗り越えられようともそうでなくても、神はともにいてくださる。慰めを与えてくださる。そう信じ続けることへの招きです。「信じなければならぬ」という命令、断定であればそれは救いにはなりません。無理やり自分を納得させようとしているだけにすぎないのです。神の訓練はあると思います。しかし他人が、苦しんでいる人におかって「それは神の訓練だ」などということはゆるされません。自分で自分を追い込む必要もありません。そうではなく、この苦難の中にも、すべての不信仰と戦ってくださった主イエスがいてくださる。主イエスがここでも、いえ、苦難の中だからこそ、神を見上げて生きるように、とお語りくださる。そう信じる信仰に生きる。訓練というならば、恵みにもういちど立ち返らせていただく訓練なのではないでしょうか。

あれが、訓練だった、と言えるのは、結局はその出来事がすぎてからなのだと思うのです。その渦中にある時は、とにかく祈る、祈ってもらう、祈りを失わないこと。訓練というのは、すこし引いた、客観的なものの見方だと思います。苦しんでいる時に「訓練だ」などとはおもえないわけで、もしそれができるなら、それは血を流すほどのものではない、ということなのだと思うのです。

その上でなお、わたしたちを訓練なさいます。それは、わたしたちをご自分の神聖にあずかせようとしてくださるからです。わたしたちは主イエスの恵みによって命を与えられます。神におゆだねして生きます。けれども、それは幼ないままでいいという意味ではありません。じぶんで思う通りにはコントロールできないけれど、神は人生のできごとによって、もちろん主イエスが共にいてくださる中で、わたしたちを神に近づけてくださいます。すべて神の御業でありながら、わたしたち一人ひとりを鍛えてくださるのです。神聖にあずかる、というのは聖なる者になる。神とおなじになる、神を知る、ということです。あなたはすでにわたしのこなのだから、わたしのところに来なさい、わたしを知りなさいと神は招いてくださいます。そしてそのことを「技という平和に満ちた実を結ばせるのです」と語ります。ここで鍛錬なしに、疲れ果てて神の前から去ってしまったら、世の中と同じでいいじゃないか、流されればいいじゃないかとなってしまったら、真実の平和がこないのです。神の平和を実現することができなくなるのです。平和とはみんなが愛に生きて争いがなくなる、という意味でもあるでしょうけれど、義というのですから、神の前にただし、神との正しい関係を与えられるということです。神との間に、戦いではなくて平和が与えられるのです。神との平和というのは、いくつかある生きる課題にすぎない

いではありません。ここから全てが始まるといってもいいものです。愛に生きるにしても、神との間に義という平和がなくては愛に生き始めることもできません。神の義をいただかなくては、神の子とされなくては愛に生きることがわからないからです。ぐるぐるまわるようですが、愛に生きることは時につらいことでもあります。なぐられたなぐりかえすのではなくて、ふみとどまって左の頬を出すとはどういうことかを考えることだからです。きにいらぬ人、一度でも自分を傷つけた人を赦さず、縁を切って、心の中で殺せば気がすむのに、そうはせずに付き合いをつづけるのが愛だからです。確かに疲れます。けれども主の鍛錬によって、少しずつ平和の実を結ぶものにしていってください、そう信じて生きるのが信仰者です。

「だから萎えた手と弱くなった膝をまっすぐにしなさい。」

ここでイザヤ書35：1-6を読みます。

荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ／砂漠よ、喜び、花を咲かせよ／野ばらの花を一面に咲かせよ。花を咲かせ／大いに喜んで、声をあげよ。砂漠はレバノンの栄光を与えられ／カルメルとシャロンの輝きに飾られる。人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る。

弱った手に力を込め／よろめく膝を強くせよ。心おののく人々に言え。「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。」

そのとき、見えない人の目が開き／聞こえない人の耳が開く。そのとき／歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。荒れ野に水が湧きいで／荒れ地に川が流れる。

弱った手、萎えた手、よろめく膝、弱くなった膝。神を見失い、捨てられたような思いで打ちひしがれている人間の姿です。疲れ果てた姿です。けれども、神は回復を約束してください。野薔薇が一面に咲きます。主の栄光と神の輝きを見ることを約束してください。敵を打ち、悪に報いて正義を実現してください。その時、見えない人の目が開、聞こえない人の耳が開きます。歩けなかった人が鹿のように躍り上がります。萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにすることができるのは、神の救いの御業、イエス・キリストの救いが実現したからです。神がわたしたちの手と膝をつよくしてください。そのことを受け止めること、これが神の訓練にほかならないと思います。そうして、道を踏み外すことなく、まっすぐ歩くことができます。